瑷（あい）

光耀抄 …… 2
琥珀集 …… 6
瑠璃集 …… 15
瑪瑙集 …… 28
紅玉集 …… 30
俳誌交歓 …… 31
５月号月評 …… 32
恵贈句集拝見（59） …… 34
恵贈俳誌拝見（28） …… 36
特別作品「秋のイタリアの旅Ⅰ」 …… 38
「愛されて」 …… 40
琥珀集作品鑑賞 …… 42
瑠璃集作品鑑賞Ⅰ …… 43
瑠璃集作品鑑賞Ⅱ …… 44
瑪瑙集紅玉集作品鑑賞 …… 45
ひこばえ通信（21） …… 47
他誌転載 …… 48
妣の国父の蒼天（50） …… 50
瑗本部句会会報 …… 52

2013/5　第86号

今月の一句

口ずさむ唐行き唄や枇杷饐えて　桂樟蹊子

九州島原から天草へ旅をされた時の句である。口之津港から南国へ売られていった娘さんたちを悲しんだ唄「島原小唄」を聞いて涙された師の姿が浮かぶ。貧しさゆえとは言いながら、身を売らねばならなかった昔の哀れが「枇杷饐えて」の季語に上手くあらわれている。動かない季語のお手本であろう。

隆　子

PDF= 俳誌の salon

孕み鹿

塩路隆子

目刺焼く五黄土星のふたり住み

モニターの嬰は勾玉桃の頃

ゐる筈の目高ゐませぬ春の川

耕人へ親しげに寄る夕鴉

母性はやうるむ眼となり孕み鹿

野焼男の火を叩きてはカップ酒

托卵の鳥への不信霾ぐもり

PDF= 俳誌の salon

五月号光耀抄

塩路　隆子選

叱る人なき身の自由シャボン玉　藤見佳楠子
冬鵙の百戸の天をつつぬけに　杉本　綾
火牡丹の頭上乱舞やお松明　谷口　俊郎
蒲生野はロマンの里や春の風　藤本　秀機
鮑子の解禁日なり淡路島　山口キミコ
クリオネにほぐるる旅愁北の宿　中村ふく子
月ケ瀬の風の起伏や梅見坂　伊東　和子
おもむろに抜くコルク栓春の宴　長濱　順子
野仏の膝に溜れる春の雨　田中　浅子
春昼や忿怒のゆるぶ不動尊　片岡久美子
桟橋に白の一点ゆりかもめ　佐用　圭子
大漁旗を前に雛段漁師汁　竹内　悦子
さりげなくつくばひに置き白椿　辻　香秀
山伏の法螺に震へる木の芽かな　中井登喜子
旧道に入ればものの芽盛んなる　中川すみ子
国旗揚ぐる誉れの一戸建国日　中本　吉信
受験子の笑顔のメール今届き　西垣　順子

PDF= 俳誌の salon

囀や目覚め清らに坊の宿　西田　史郎
夕日さす丹波の山の雪の襞　能勢　栄子
ぐいと出る籠松明の火の粉雨　橋本　靖子
「をなご講」てふ姥の会花菜飯　松岡　和子
啓蟄や先づワーカーの蟻に会ふ　三川美代子
路地迷路忍者の里に恋の猫　宮田　香
捨舟は禽の遊び場湖寒し　池田加寿子
たんぽぽの城垣寧し猫眠る　伊藤　純子
野面這ふ風の音聞く菫かな　大島みよし
冴返る始発電単の遠ひびき　大松　一枝
ハイテクの農機具市や米どころ　小澤　菜美
クレソンの程よき苦味春宴　笠井　清佑
極楽を玻璃より見据ゑ冬の蠅　北尾　章郎
六星に出でたる乱気余寒なり　国包　澄子
どぼっどぼっと長靴沈む雪解山　坂根　宏子
早まりて降りたる駅の梅真白　阪本　哲弘
啓蟄や巨大隕石宇宙より　塩路　五郎
春の風邪癒えて饒舌糸電話　鈴木　照子
行人の言葉少なき春の雨　山本　孝夫
あたたかやバケット抱へ遊歩道　森下　康子

PDF= 俳誌の salon

練り切りの紅のにじみや春日和　石川かおり
居留地の飾り看板うららなる　井口　淳子
まばたきのこの一瞬の落椿　宮崎左智子
雛段に生家の家紋色褪せて　小西　和子
多田仏京へお出座し桃の花　伊藤　和子
料峭や美男におはす阿修羅神　西郷　慶子
目鼻なきをさなの無垢や這子雛　坂上　香菜
雪霏々と時に昭和の復興期　笹井　康夫
余寒なほひとりで過すオペ前夜　田下　宮子
飾る位置替へて雛の右ひだり　田中　久子
佐保姫の身支度遅し古都住まひ　高谷　栄一
身を癒す露天の風呂に雪の舞　高屋登喜子
散歩する老人と犬仏の座　竹内喜代子
目鼻なき小さき露座仏春しぐれ　辻　知代子
舟入りより高瀬に乗りて花筏　津田　富司
蛍の光震へる声で児に贈る　土井久美子
時経たる遺品の整理春愁　十時　和子
寒水の手応もなし無洗米　西村　敏子
匠らの努力の証盆梅展　秦　和子
密やかに英気養ふ冬木立　平井　紀夫

PDF= 俳誌の salon

梅香りつるかめを彫る手水鉢　福本すみ子
水温み白き帆船動き出す　増田　一代
乳飲み子に春の地球は眩しかろ　松田　和子
青空に辛夷きは立ちゴッホ展　松田　洋子
恵方巻ねがひごとなど別になく　山内タカ子
手造りの吊るし雛や母の愛　山口　和子
幾とせを杜の都に卒業す　山崎　里美
芹刻む小さき旬を香らせて　山田　愛子
世辞下手は父の遺伝子蕗の薹　吉田　宏之
洋風の新島邸や梅香り　横田　矩子
一本の春の日傘に母娘　吉田　希望
雛祭男の作る散し寿司　渡部　法子
椶の芽を食みぬ生気の出るやうに　和田　郁子
モニターの胎児は二寸山笑ふ　和田森早苗
盆梅の講釈縷縷と庵主さま　粟倉　昌子
雛祭御殿飾りの飛騨の里　飯田美千子
黒潮のぬくもり纏ひ早桜　板倉　安正
法華寺や天平雛の面長き　大谷　信子
街なかで見かける力士春と思ふ　大堀　賢二
迷ひ猫探す貼紙春の雪　桂　敦子
おほてらの鴟尾暮れのこり修二会待つ　川崎　利子

PDF= 俳誌の salon

琥珀集

シャボン玉　藤見佳楠子

就活のスーツ一色山笑ふ
叱る人なき身の自由シャボン玉
パンジーに植ゑ替へ済める花時計
ふらここに思ひ出揺れて影ゆれて
春の宵はや灯を点す屋台そば
久々に島へ花嫁春の潮
初つばめ海より明くる島暮し

冬鵙　杉本綾

夜は狸来るらし梅の花開き
節分の八ッ橋提げて異国人
抽斗に亡夫の匂ひや枇杷の花
冬鵙や百戸の天をつつぬけに
羽衣の柳芽吹きて華やげり
一服の薄茶あはあは花菜活け
朝に鳴き夕べはいづく寒鴉

お松明　谷日俊郎

太仏殿闇に沈みて修二会かな
籠松明匂ひも煙もありがたき
闇めがけ突き出す火玉お松明
火牡丹の頭上乱舞やお松明
竹矢来に縋り火を浴びお松明
お松明のお蔭を得むと燠拾ふ
修二会堂闇に幽かに悔過(けか)の法

PDF= 俳誌の salon

蒲生野

藤本　秀機

縁台の雪丸火鉢京の町
長々の冬の五ヶ月十日町
小綺麗に足軽屋敷春の木戸
合戦の観音寺跡忘れ雪
街道の六足門や春の雪（尼子）
蒲生野はロマンの里や春の風
橡の木の根元祠や春神事

里神楽

山口キミコ

春を呼ぶ郷土芸能里神楽
鮑子の解禁日なり淡路島
税申告終へてドライブ余呉の湖
願かけの転利（ころり）観音寒椿（長浜赤後寺）
里人の護る観音雪明かり
耕運機春田いづこも動き出し
瀬田川に沿ひたる墓石春の雨

クリオネ

中村ふく子

とめどなき雪の雫のオルゴール
クリオネにほぐるる旅愁雫の宿
小白鳥の群れて純白池眩し
真向ひは竹生島なり鮒を挿す
存分に大鷲捉へ遠めがね
風花や昼を無聊に沼太郎
助走する白鳥水を蹴り上げて

梅見坂

伊東　和子

カーナビに頼る梅渓七曲り（月ヶ瀬三句）
渓風と香る風逢ふ梅花村
月ヶ瀬の風の起伏や梅見坂
春浅し恋情塚の赤き供花
近松の碑へと絡まり斑雪
人の祖は魚とや騒ぐ東風の波
節分の寿司千本を完売し

PDF= 俳誌の salon

春

長濱　順子

春光を纏ふマネキン京の街
おもむろに抜くコルク栓春の宴
取り替へる車内広告春兆し
ほのぼのと比叡山麓蕗の薹
気に入りのビーズの指輪四温なる
梅ふふむ皇女ゆかりの尼門跡
杉戸絵の犬愛らしや春隣

春の雨

田中　浅子

一休を偲び春禽声弾む
囀や禅師手擦れの篠の笛
野仏の膝に溜れる春の雨
おちこちの牛に見られて梅見かな
菜花や渡れば揺るる流れ橋
立ち止る小さき花舗に春満載
晩年は三分咲なる梅が好き

聖護院

片岡久美子

宸殿の砂紋に自在春日影
門前に肉桂（ニッキ）の香り春浅き
春めける御殿全開花鳥の図
紅梅や深き廟の学問所
回廊を渡る法螺貝花あしび
春昼や念怒のゆるぶ不動尊
早春のレモンをしぼる昼餉かな

伏見樽

佐用　圭子

あたたかや新島邸木の流し台
青年の胸に掲げし懸想文
夜咄の円窓の間のおぼろなる
春めくや寺苑に積める伏見樽
聖護院行者と隣り焚火の輪
庭少し降り残したる春の雪
桟橋に白の一点ゆりかもめ

PDF= 俳誌の salon

雛　壇

竹内　悦子

大漁旗を前に雛壇漁師汁
神妙に願ひを秘めて伊勢詣
音もなき電気自動車黄沙降り
あたたかやベビーベッドを設へて
嬰生れる頃には咲けよ牡丹の芽
乙女椿官庁街を彩りて
淡雪に舞台女優の心地かな

白　椿

辻　香秀

梅白く枝の先まで蕾つけ
九谷焼の一輪ざしや梅の花
さりげなくつくばひに置き白椿
しのび逢ひ紙燭にうかぶしだれ梅
春コート魅惑の色に変へてみる
大望の若人巣立つ弥生かな
山茶花の葉かげにかくれ鳥の恋

節　分

中井登喜子

喝采の劇場出でて春の風
節分会当世の鬼のVサイン
節分のぜんざい接待列に蹤く
境内に懸想文売り人を呼ぶ
山伏の法螺に震へる木の芽かな
初午や母のいなりの薄味に
加湿器にアロマ加へて葛湯刻

梅の花

中川すみ子

老木の情ほつほつと梅の花
植ゑ替へを待つ盆梅の杖をつき
茅葺の氷柱の雫とめどなき
チョコレート供へバレンタインの日
エレベーター知らぬ同志の春の笑み
ふる里の風情を醸す雪並木
旧道に入ればものの芽盛んなる

PDF= 俳誌の salon

瑠璃集

揚雲雀　山本　孝夫

料峭や堤を歩む影細き
行人の言葉少なき春の雨
腕白の戻り来る声犬ふぐり
木津川の流れ悠々日永かな
隠し事出来ぬ質(たち)です揚雲雀

バケット　森下　康子

春の塵ポイントカード増えつづく
ビル街をいっ気に抜けて春一番
あたたかやバケット抱へ遊歩道
霾りて視界六尺昼の闇
ジーンズの似合ふ体型菖蒲の芽

お松明　石川かおり

お松明の残り香まとふ家路かな
春鹿に背をつつかれし二月堂
公園に城址の石碑紫木蓮
練り切の紅のにじみや春日和
太秦に大魔人像風光る（大映通り商店街）

飾り看板　井口　淳子

居留地の飾り看板うららなる
王朝の至宝にふれて春惜しむ（中国王朝の至宝展二句）
あたたかな面ふくよか婦人俑（唐の時代）
認知症の講座満席春の昼
京情緒の日永たっぷり市内バス

春の川　宮崎左智子

まばたきのこの一瞬の落椿
梅日和時速一〇〇キロ吾が余生
里山に機の音なす二月尽
鴉にもホワイトデーと云ふ日あり
憂きことはみんな流して春の川

PDF= 俳誌の salon

五月号月評

塩路　隆子

叱る人なき身の自由シャボン玉　　藤見佳楠子

作者は美しく齢を重ねられたお一人で、お手本とさせて戴いている。お句も若々しい。掲句をみていただいても分かるように「シャボン玉」の季語を置くことにより作者のセンスの良さが覗える。季語の置き方として「さくらんぼ」でもいい筈。あえて「シャボン玉」をえらばれたのは、「叱る人なき」の心の不安定さと虚ろさと、自由に空を旅するシャボン玉の両面を上手く捉えられていると甚く感心をした。また他の句にも作者のバイタリテイーに改めて感動を覚えた。

冬鵙の百戸の天をつつぬけに　　杉本　綾

ご主人を亡くされ独り住まいをされているが、最近めきめきとお元気、意欲的になられたことを嬉しく思っている。百戸の里と言うのは余呉湖を訪ねられた折の句である。秋の鵙は激しく鳴く。かと言って冬の鵙が静かだとは言えない。冬の晴天にはやはり猛々しい声で鳴いている。そこで作者は「百戸の天」と「筒抜け」と言う措辞を選ばれた。余呉郷の里の天へ筒抜けに響いたそうである。中七から下五にかけての盛り上がりに注目して欲しい。

蒲生野はロマンの里や春の風　　藤本　秀機

琵琶湖の東岸に広がる野であり古くから男性は狩猟をしたり、女性は薬草をとったりしたのが蒲生野であった。また万葉集には額田王と大海人皇子との贈答歌として有名な地である。「あかねさす　むらさきの行き標野行野守は見ずや君が袖振る」（額田王）「むらさきのにほへる妹を憎くあらば人妻ゆゑにわれ恋ひめやも」（大海人皇子）がそうである。「ロマンの里」と中七文字で表現されたが、その蒲生野に立たれた感懐の広がりは充分に読者に伝わる。季語「春の風」が更に連想を広げ良い作品に仕上げられている。

（以下略）

PDF= 俳誌の salon